

論文

配偶者を介護する高齢の夫介護者に対する 介護支援専門員の支援実態に関する研究

The Study of skill of care managers who support elderly husband carers

一瀬 貴子*¹

要約：本稿の目的は、高齢の夫介護者に対して、居宅介護支援事業所の介護支援専門員が行う支援方法（以下、ソーシャルワーク実践スキルとする）の実態を明らかにすることである。

本研究の調査期間は、関西福祉大学社会福祉学部倫理審査委員会での承認後（承認番号：関福大発3-0222号）、令和4年8月15日～9月30日までである。A県居宅介護支援事業所全数1,725か所（令和4年8月1日時点でホームページに掲載）に配置されている介護支援専門員1,725名を対象に、無記名式の質問紙を郵送法にて配布した。ただし、閉鎖等により返送があった305箇所を除く1,420箇所1,420名を配布対象者とした。その結果、297名からの回答があったが、65歳以上の夫介護者を支援した経験があり、かつ、介護支援専門員の資格を保有していると回答した292名を有効回答とし、分析対象とした。

分析の結果、介護支援専門員のソーシャルワーク実践スキル16項目のうち、平均値が高かった項目は、①「介護者と信頼関係を築くことができるように、話を何度も聴いた」②「これまで介護者がとってきたコミュニケーション方法や行動を否定せず、介護者に溶け込むように努力した」③「介護者と信頼関係を築くことができるように、介護者宅を訪問した」④「介護者のイライラが発生するのは、どのような場面であるのか、どのような理由が背景にあるのかという点について介護者の認識度合いを確かめた」⑤「他職種とカンファレンスの機会を持った」⑥「他職種と連携をして、訪問や面接を行った」⑦「介護者がこれまで送ってきた生活史について、称賛した」であることが分かった。介護支援専門員と高齢の夫介護者の間で信頼関係を構築しようとする支援の技法が最も多く使われていることが明らかになったといえる。

Key Words：高齢の夫介護者、居宅介護支援事業所の介護支援専門員、ソーシャルワーク実践スキル、信頼関係構築、ジョイニング

I. 序章

『高齢社会白書（令和5年度版）』によると、我が国の65歳以上人口は3,624万人で高齢化率は29.0%であり、65歳以上の者のいる世帯は、令和3年で2,580万9,000世帯と全体の49.7%を占め、単独世帯と夫婦のみ世帯の割合がそれぞれ3割とされている〔高齢社会白書（令和5年度版）〕。また、要介護者等と同居している主介護者の年齢は、男性72.4%、女性73.8%が60歳以上を占めており、老老介護の実態にあることが明らかとなっている。『高齢社会白書（令和5年度版）』により主な介護者の続柄をみると、配偶者23.8%、子20.7%、子の配偶者7.5%、別居親族13.6%、事業者12.1%であり、配偶者のうち、男性が35.0%、女性が65.0%とされている〔高齢社会白書（令和5年度版）〕。これらのデータより、

老老介護の状況にあり、家族介護者で精神的・経済的・身体的負担を感じている人が多いと推測される。

介護保険制度が創設されて23年が経過したが、介護保険制度では家族介護者に対する支援が十分であるとはいえない。それゆえ、家族介護者への支援策が重要な課題となっている。〔厚生労働省、家族介護者マニュアル〕では、「これからの家族介護者を取り巻く状況の大きな変化に対応して、今後、家族介護者支援施策が掲げるべき目標は、家族介護と仕事や社会参加、自分の生活を両立することと、心身の健康維持と生活の質の維持・充実（人生の質の維持や充実）の両輪がともに円滑に回りながら、介護の質、生活、人生の質も同時に確保される家族介護者支援を推進することである」と述べられている。また、「介護支援専門員は、要介護者および家族介護者のもっとも身近な相談専門職であるため、要介護者のみならず家族介護者自身の生活の質を守り、家族介護者が自身の人生をより豊かに暮らすことができるよう、家族

2023年11月7日受付／2024年1月10日受理

*¹ ISSE Takako

関西福祉大学 社会福祉学部

介護者にまで視野を広め、相談支援活動に取り組むことが重要である」〔厚生労働省, 家族介護者マニュアル〕とも述べている。

「男性介護者（配偶者を介護する65歳以上の高齢の夫介護者, 以下, 夫介護者とする）について, いかなる支援をする必要があるのか」という研究テーマについての既存研究は数少ない。男性介護者（夫介護者）が, いかなる介護実態にあるのかといった点についての既存研究はいくつか見受けられる。〔宇多・都筑・金川, 2017〕〔太田, 2019〕〔西尾・坂梨・木村・古賀, 2019〕の研究では, 男性介護者の特徴として次の7点が明らかとなっている。

①高齢の男性介護者の介護における情緒的疲弊は, 要介護者の認知症の症状に伴う生活自立度によって大きな影響を受ける。②男性介護者においては, ストレッサーを軽減するための対処が問題解決につながらずに悪循環を形成し, 情緒的疲弊を引き起こしている可能性がある。③男性介護者のうち, 介護期間が長く要介護度が高いケースでは, 必要な日常生活援助の観察と経済状態を鑑みたくえでレスパイトのためのショートステイやデイサービスの利用や家庭内で受ける介護サービスに関する情報を提供する必要がある。④介護保険制度創設後は, 多くのサービス機関, サービス事業所, 専門職がかかわっているにも関わらず, 「介護殺人事件」が起きている場合が少なくない。しかも, 介護サービスを利用している中で起きている場合も少なくなく, その場合は, ケアプランを作成する介護支援専門員が訪問していて, その中で事件が発生している。⑤男性介護者が介護を引き受けた理由は, 「家族としての義務, 当たり前, できることをする, 自分以外にみる人がいない」などであった。「男性介護者にとって介護とは何か?」という命題に対して, 「当然の義務（当然の仕事・夫婦間で介護をするのは当たり前・当然の責務）, 運命やなりゆき（本人の申し出によりなりゆき・私の運命）, 他人に任せられない, 不安（介護の仕方を指摘してくれる人がいない）, 生き甲斐（できるだけ長く人生を共に生きたい・思いやり）」と答えている夫介護者が多かった。⑥男性介護者の困っていることとしては, 「自分の健康, 自分の時間がない, 外出できない, 将来不安, 介護を代わりにしてくれる人がいない, 気が休まらない, 介護ストレスがたまっている」などである。⑦夫介護者の支援ニーズとしては, 「必要時に適切なサービス（自分が病院に行く間の世話, 団地での車いすの昇降, 深夜のヘルプ）」「家族介護者への

支援（リフレッシュ休暇・男性介護者との交流会・男性介護者自身の休息支援）」「介護保険制度の見直し（ヘルパーサービスの単位時間が短い・制約が多い）」である。

このように, 少しずつではあるが, 男性介護者（夫介護者）の介護実態は明らかにされている。しかし, 孤立的な状況の中で介護をするケースが多いとされる男性介護者に対する効果的な支援のあり方についての研究は数少ない。そこで, 本研究の目的を次のように設定した。本研究の目的は, 高齢の夫介護者に対して, 居宅介護支援事業所の介護支援専門員が行う支援方法（以下, ソーシャルワーク実践スキルとする）の実態を明らかにすることである。

II. 調査方法

1. 調査期間

本研究の調査期間は, 関西福祉大学社会福祉学部倫理審査委員会での承認後(承認番号:関福大発3-0222号), 令和4年8月15日～9月30日までである。A県居宅介護支援事業所全数1,725か所(令和4年8月1日時点でホームページに掲載)に配置されている介護支援専門員1,725名を対象に, 無記名式の質問紙を郵送法にて配布した。ただし, 閉鎖等により返送があった305箇所を除く1,420箇所1,420名を配布対象者とした。その結果, 297名からの回答があったが, 65歳以上の夫介護者を支援した経験があり, かつ, 介護支援専門員の資格を保有していると回答した292名を有効回答とし, 分析対象とした(有効回答率:20.6%)。介護支援専門員の性別は, 男性:60名(20.5%), 女性231名(79.1%), 性別不明1名(0.3%)である。

2. ソーシャルワーク実践スキルとは

福島〔2005〕によると, ソーシャルワーク実践スキルとは, 「ソーシャルワークの価値を基盤にして行う特別な知識や訓練を要する行動(言動)」として定義されている。一瀬の研究でもこの定義を採用することとする。

福島〔2005〕は, ソーシャルワーク実践スキル34項目について, 因子分析の結果, ①「問題予防や課題解決のスキル群」(利用者自身の問題に対処する方法を具体的に提案する・不健康な行動パターンを減らす方法を共に考える・問題再発の予防法を提案するなどの項目から構成されている), ②「信頼関係を築くスキル群」(信頼関係を築くために共感する・情緒的サポートをする・あ

るがままに受け入れられていると実践できるようにするなどから構成されている), ③「対人関係技能や自己評価を高めるスキル群」(問題解決技能を生活場面で練習する手助けをする・考えや感情を他人に効果的に伝えるお手本を見せる・自分をねぎらい, ご褒美を与える方法を示すなどからなる), ④「ケースマネジメントのスキル群」(抱える問題に関する社会問題や法政策について考察する・権利を擁護するために代弁する・他機関や施設のサービスを具体的に紹介するなどの項目からなる)ことを明らかにした。

一瀬の研究では, 福島〔2005〕の研究を基盤とし, <問題予防や課題解決のスキル群>として, 「介護者のイライラが発生するのは, どのような場面であるのか, どのような理由が背景となるのかという点について介護者の認識度合いを確かめた」「介護者のストレスに対する反応の仕方が, 同時にストレスを持続させる結果となっていることを理解できるように仕向けた(問題偽解決パターンの分析)」「自分の問題行動を処理したり, コントロールする方法を介護者に伝えた(行動変容の促進)」 「介護者が新たな問題発生のある状況を予測できるよう手助けをした」「介護者に対して, 高齢者のコミュニケーションパターンや行動の中で変容させてほしいと思うことを聞いた(トラッキング)」の5項目, <信頼関係を築くスキル群>として, 「介護者と信頼関係を築くことができるように, 介護者宅を訪問した」「介護者と信頼関係を築くことができるように, 話を何度も聴いた」「これまで介護者がとってきたコミュニケーション方法や行動を否定せず, 介護者に溶け込むように努力した(ジョイニング)」「介護者がこれまで送ってきた生活史について, 称賛した(コンプリメント)」という4項目, <対人関係技能や自己評価を高めるスキル群>として, 「介護者がこれまでの生活を乗り切った対処方法の中で, 効果的であった点をとともに見出すようにした(コーピングクエスチョン)」「介護者それぞれにとって, 問題が解決した状態とはいかなる状況を示すのかを確かめた(ミラクルクエスチョン)」「問題が解決した状態を目指すためにどのような資源や対処を取ればよいと考えるのかを介護者ととも考えた(スケーリングクエスチョン)」「新たに学んだ問題解決技能を介護者が実際の生活場面で練習できるように手助けした」「介護者が育った家族における人間関係や価値観が, 今抱えている価値観や行動に影響を及ぼしていることを理解してもらうようにした(ポーエンの家族療法)」という5項

目, <ケースマネジメントのスキル群>として, 「他職種とカンファレンスの機会を持った」「他職種と連携をして, 訪問や面接を行った」という2項目からなる計16項目を設定した。

16項目に対し, 「よくそうしていた」「時々そうしていた」「ほとんどしていなかった」「全くしていなかった」の4件法で記した。

Ⅲ. 分析結果

1. 介護支援専門員のソーシャルワーク実践スキルの単純集計結果

ソーシャルワーク実践スキル16項目について, 平均値が高かった順に並べると, ①「介護者と信頼関係を築くことができるように, 話を何度も聴いた(平均値: 3.7192)」②「これまで介護者がとってきたコミュニケーション方法や行動を否定せず, 介護者に溶け込むように努力した(ジョイニング)(平均値: 3.6438)」③「介護者と信頼関係を築くことができるように, 介護者宅を訪問した(平均値: 3.6404)」④「介護者のイライラが発生するのは, どのような場面であるのか, どのような理由が背景にあるのかという点について介護者の認識度合いを確かめた(平均値: 3.4536)」⑤「他職種とカンファレンスの機会を持った(平均値: 3.4291)」⑥「他職種と連携をして, 訪問や面接を行った(平均値: 3.3746)」⑦「介護者がこれまで送ってきた生活史について, 称賛した(コンプリメント)(平均値: 3.3527)」⑧「問題が解決した状態を目指すためにどんな資源や対処をとればよいのかを介護者ととも考えた(スケーリングクエスチョン)(平均値: 3.3345)」⑨「介護者が新たな問題発生のある状況を予測できるように手助けした(平均値: 3.0897)」⑩「介護者がこれまでの生活を乗り切った対処方法の中で, 効果的であった点をとともに見出すようにした(コーピングクエスチョン)(平均値: 3.031)」⑪「介護者それぞれにとって問題が解決した状態とはいかなる状況を示すのかを確かめた(ミラクルクエスチョン)(平均値: 3.000)」⑫「自分の問題行動を処理したり, コントロールする方法を介護者に伝えた(行動変容の促進)(平均値: 2.7805)」⑬「介護者のストレスに対する反応の仕方が, 同時にストレスを持続させる結果となっていることを理解できるように仕向けた(問題偽解決パターンの分析)(平均値: 2.7684)」⑭「新たに学んだ問題解決スキルを, 介護者が実際の生活場面で練習できるように手助けをした(平均

値:2.6873)」⑮「介護者に対して、高齢者のコミュニケーションパターンや行動の中で変容させてほしいと思うことを聞いた(トラッキング)(平均値:2.6761)」⑯「介護者が育った家族における人間関係や価値観が、今抱いている価値観や行動に影響を及ぼしていることを理解してもらえるようにした(ポーエンの家族療法)(平均値:2.4399)」となった。

2. 介護支援専門員のソーシャルワーク実践スキルと基本的属性の関連性について

次に、介護支援専門員のソーシャルワーク実践スキルと基本的属性との間に、何らかの関連があるのかを調べることにした。

(1) 介護支援専門員のソーシャルワーク実践スキルと基本的属性との関連について

はじめに、有効回答者の基本的属性(年齢と実務経験年数)の分布について述べる。

介護支援専門員の年齢については、平均年齢は53.89歳±8.813歳であり、分布としては二極化していることが分かった。介護支援専門員の実務年数については、平均経験年数は12.45年±5.986年であり、ほぼ正規分布していることが分かった(図1-1、図1-2参照)。

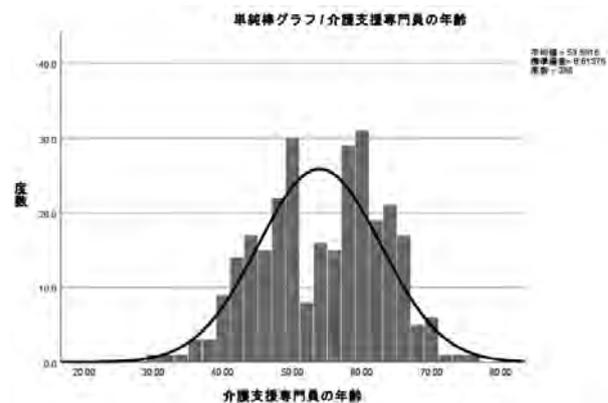


図1-1 介護支援専門員の年齢分布図

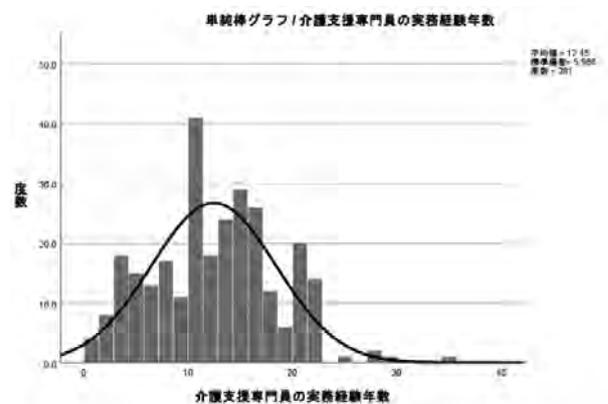


図1-2 介護支援専門員の実務経験年数の分布図

次に、介護支援専門員が活用したソーシャルワーク実践スキルと基本的属性(年齢および実務経験年数)との

表1 重回帰分析結果

モデル A	R2 乗 .025	調整済み R2 乗 .018
モデル B	R2 乗 .036	調整済み R2 乗 .029
モデル C	R2 乗 .031	調整済み R2 乗 .024

モデル	非標準化係数 B	標準化係数 β	有意確率	B の 95.0% の信頼区間	
				下限	上限
A (定数)	1.992		<.001	1.399	2.585
	年齢 .015	.164	.013	.003	.027
	実務経験年数 -.002	-.013	.846	-.019	.016
B (定数)	1.407		<.001	.771	2.044
	年齢 .019	.192	.003	.006	.032
	実務経験年数 .000	-.003	.966	-.019	.018
C (定数)	2.196		<.001	1.656	2.735
	年齢 .013	.150	.022	.022	.023
	実務経験年数 .006	.048	.466	-.010	.022

強制投入法

A 従属変数: 「自分の問題行動を処理したり、コントロールする方法を介護者に伝えた(行動変容の促進)」

B 従属変数: 「介護者が育った家族における人間関係や価値観が、今抱いている価値観や行動に影響を及ぼしていることを理解してもらうようにした(ポーエンの家族療法)」

C 従属変数: 「介護者それぞれにとって、問題が解決した状態とはいかなる状況を示すのかを確かめた(ミラクルクエストン)」

関連を調べるために、「介護支援専門員の実務経験年数」および「介護支援専門員の年齢」を独立変数、「介護支援専門員のソーシャルワーク実践スキル（16項目）」を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、3つのソーシャルワーク実践スキルに対して、統計的に有意な結果が生じた（表1参照）。

(2) 「介護支援専門員の年齢」と「介護支援専門員の実務経験年数」の相関分析結果

(1) での分析結果から、「介護支援専門員の年齢」「介護支援専門員の実務経験年数」を独立変数、「介護支援専門員のソーシャルワーク実践スキル」を従属変数とした重回帰分析の結果、介護支援専門員のソーシャルワーク実践スキル16項目のうち、「自分の問題行動を処理したり、コントロールする方法を介護者に伝えた（行動変容の促進）」「介護者が育った家族における人間関係や価値観が、今抱いている価値観や行動に影響を及ぼしていることを理解してもらうようにした（ボーエンの家族療法）」「介護者それぞれにとって、問題が解決した状態とはいかなる状況を示すのかを確かめた（ミラクルクエスチョン）」という3つのソーシャルワーク実践スキルには、「介護支援専門員の年齢」が統計的に有意に正の方向にきていることが分かった。

この解析では、従属変数をソーシャルワーク実践スキルの各質問項目として、独立変数に「介護支援専門員の年齢」と「実務経験年数」を入れた重回帰分析を行い、介護支援専門員のソーシャルワーク実践スキル3つの検

討について、介護支援専門員の年齢が、実務経験年数で調整したときに、有意差をもって回答項目を正の方向に回答する関連をもつことが示された。

重回帰分析を行うにあたって、独立変数の間に相関があると、多重共線性の存在により間違っって有意差を算出してしまうことがあるため、「介護支援専門員の年齢」「介護支援専門員の実務経験年数」という2つの独立変数間の相関を調べることにした。

「介護支援専門員の年齢」と「実務経験年数」との散布図を下記のように作成したところ、図2より、見た目でも正の相関がありそうな散布図になった。そのため、次に、単回帰分析により、有意な相関があるかを調べた。

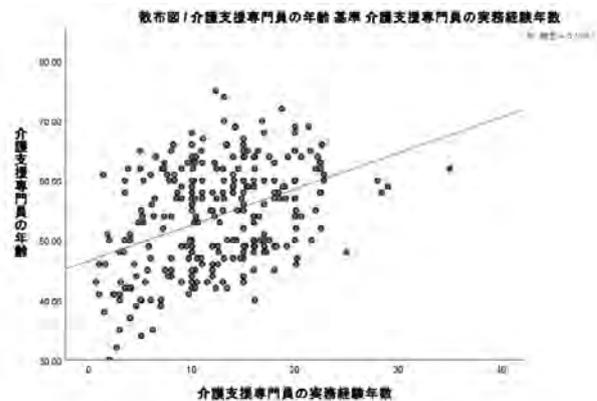


図2 「介護支援専門員の年齢」と「実務経験年数」との散布図

上記のように、各変数同士の相関について、回帰係数は0.411 (p < 0.001) と有意だった。よって、以下から

表2 単回帰分析結果

回帰統計	
モデル A´	
R2 乗 .021	調整済み R2 乗 .017
モデル B´	
R2 乗 .029	調整済み R2 乗 .025
モデル C´	
R2 乗 .029	調整済み R2 乗 .025

モデル	非標準化係数 B	標準化係数 β	有意確率	B の 95.0% の信頼区間	
				下限	上限
A´ (定数)	2.075		<.001	1.487	2.659
年齢	.013	.144	.016	.002	.024
B´ (定数)	1.532		<.001	.934	2.126
年齢	.017	.169	.003	.006	.027
C´ (定数)	2.187		<.001	1.633	2.662
年齢	.014	.169	.005	.005	.024

強制投入法

A´ 従属変数：「自分の問題行動を処理したり、コントロールする方法を介護者に伝えた（行動変容の促進）」

B´ 従属変数：「介護者が育った家族における人間関係や価値観が、今抱いている価値観や行動に影響を及ぼしていることを理解してもらうようにした（ボーエンの家族療法）」

C´ 従属変数：「介護者それぞれにとって、問題が解決した状態とはいかなる状況を示すのかを確かめた（ミラクルクエスチョン）」

は独立変数を「介護支援専門員の年齢」だけとした単回帰分析として、従属変数はソーシャルワーク実践スキルの各項目とする（ここでの計算は3つのソーシャルワーク実践スキルのみ）。

ちなみに、介護支援専門員の年齢のヒストグラムは、図1-1で示した通り、正規分布していなかった。そのため、これを独立変数として採用するときは、ブートストラップ法を用いることが必要のため、以下の分析を、本法を用いた単回帰分析とする。

(3)「介護支援専門員の年齢」を独立変数とした単回帰分析

「介護支援専門員の年齢」は、図1-1に示したように正規分布していなかったため、ブートストラップを用いた単回帰分析を行う。「介護支援専門員の年齢」を独立変数、「介護支援専門員が活用したソーシャルワーク実践スキル（3項目）」を従属変数とした単回帰分析を行った。分析結果を、表2に示す。

これらから読み取れる結果について記述する。

第一に、「自分の問題行動を処理したり、コントロールする方法を介護者に伝えた（行動変容の促進）」を従属変数、「介護支援専門員の年齢」を独立変数としたモデル式はF分析で $p = 0.016$ と有意差あり、モデル式としての妥当性はある。ただし、 R^2 乗 = 0.021と低いため、回答全体の分散に対する説明力としては小さいモデル式である。散布図を図3-1に示す。

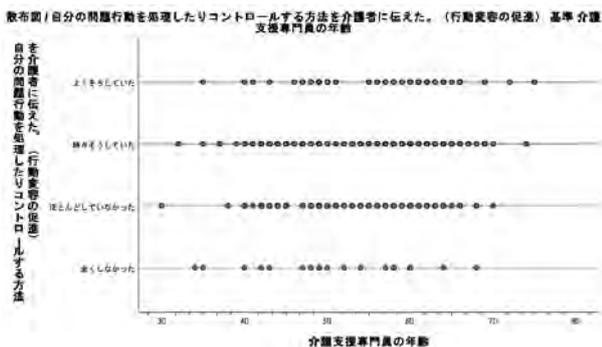


図3-1 散布図①

第二に、「介護者が育った家族における人間関係や価値観が、今抱いている価値観や行動に影響を及ぼしていることを理解してもらうようにした（ボーエンの家族療法）」を従属変数、「介護支援専門員の年齢」を独立変数としたモデル式はF分析で $p = 0.003$ と有意差あり、モデル式としての妥当性はある。ただし、 R^2 乗 = 0.029と低いため、回答全体の分散に対する説明力としては小

さいモデル式である。散布図を図3-2に示す。

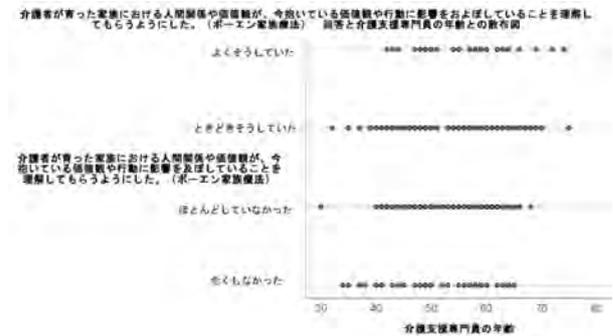


図3-2 散布図②

第三に、「介護者それぞれにとって、問題が解決した状態とはいかなる状況を示すのかを確かめた（ミラクルエクステション）」を従属変数、「介護支援専門員の年齢」を独立変数としたモデル式は、F分析で $p = 0.005$ と有意差あり、モデル式としての妥当性はある。ただし、 R^2 乗 = 0.029と低いため、回答全体の分散に対する説明力としては小さいモデル式である。散布図を図3-3に示す。

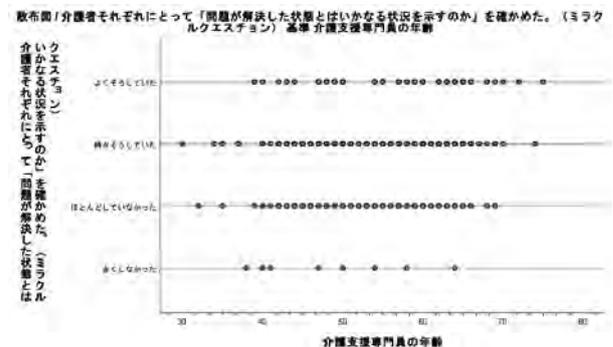


図3-3 散布図③

これらの結果を総合すると、介護支援専門員の年齢があがるほど、「自分の問題行動を処理したり、コントロールする方法を介護者に伝えた（行動変容の促進）」、「介護者が育った家族における人間関係や価値観が、今抱いている価値観や行動に影響を及ぼしていることを理解してもらうようにした（ボーエンの家族療法）」、「介護者それぞれにとって問題が解決した状態とはいかなる状況を示すのかを確かめた」という3つのソーシャルワーク実践スキルについては、介護支援専門員の年齢が上がるにつれて、「4よくそうしていた」と回答する傾向がある。

3. 介護支援専門員のソーシャルワーク実践スキル（その他—自由記述）

介護支援専門員のソーシャルワーク実践スキルについて、16項目以外にも、その他として自由記述で回答を

求めた。自由記述をKJ法によって分類した結果を表3に示す（下線は著者によるもの）。

表3 介護支援専門員のソーシャルワーク実践スキル—その他のKJ法による分類

キーワード	内容
主介護者の思いに寄り添いながら、信頼関係を構築する。	老老介護がケアマネにたどり着いたほとんどの時点で80歳や90歳を超えている場合もある。本人・主介護者の思いに寄り添う。(中略) 介護力・経済力・行政支援など、すり合わせ、話し合い、常に本人にとってのよりよい生活、最善を目指しています。
	介護保険という制度そのものに対してなかなか受け入れしてもらえなかったこともあり、特に夫介護者との話をする時間を多くとり、話を聴きとり、 <u>信頼関係を築く</u> など努力した。
	男性の介護は、比較的自分の生活を大切にすゆえに、自由になれないことでイライラされていたが、夫婦間に入るときは、喧嘩の仲裁や笑い話をするなどして、 <u>寄り添う支援</u> をしていた。
	本人や家族の生活ニーズ(困りごと等)を把握することと、隠れた問題点についても明確にするよう、心がけている。専門職としてこうすればよいのではないかと思うことも多いが、生死にかかわるようなことにならないければ、まずは、本人や家族の意向に沿って遠回りしてでも解決に結びつけていく過程が <u>信頼関係構築</u> への近道ではないかと思えます。
	<u>信頼関係を持つ</u> ことができるまではあえて訪問は月1回にしていた。
	極力、出身地など両者の理解可能な話の入り口を探した。
	要介護者(妻)の意向も重視するが、まずは、 <u>介護者の思いを傾聴</u> した。なるべくストレスがたまることのないように注意した。
夫介護者のプライドや価値観に対応。	男性介護者は、言葉にできず、抱え込む。 <u>特有のプライド</u> もあり、その時々 ^の 心身状態をより一層確認し、援助行動を変えて対応している。
	夫介護者の方針が「人に迷惑をかけないで介護する」で、本人が本来できるところも極力させない。夫を理解するため、夫と二人で話す機会を持った。
	介護者の価値観・人生観を理解したうえで支援することが必要。介護者の考え方が変わっていくことは基本望まず、支援方法を考えている。
	夫介護者の <u>自尊心</u> が高いため、できるだけ否定しないようにしていた。介護疲れを防ぐために支援できるところにできるだけ介入した。
	介護者の話をよく聞き、できるだけプラスの面を探し出し、 <u>ほめた</u> うえで、ほかの利用者はこんな風にしてるとか、色々話を行い、皆それなりに頑張っていることを伝えた。
介護者の教育・介護指導を行った。	男性の介護に対して、あまりまじめに完全にやらず、良い意味で手を抜いてほしいことを伝えた。
	介護者をいろいろな会に誘って、 <u>自然に介護について学んでもらった</u> 。
サービス担当者会議時における専門職間の情報提供・共有。(特に医療職)	サービス担当者会議開催時に、 <u>主治医や在宅薬剤師にプラン更新に参考となる意見の情報提供を求めた</u> 。ファックスを送信して回答をもらうなど。まずは、病識の理解が大事。
	高齢になると自分の意思が中心となり、若手の介護支援専門員の話よりも医師の意見のほうが通りやすいため、 <u>医師に依頼</u> していた。
各事業所の意見照会。	コロナ感染予防のため、同行説明やサービス担当者会議で参集することができなかつたため、 <u>各事業所に意見照会に参加</u> していただいた。
	コロナ禍であり、面接時間をできるだけ短時間で行うようにしているため、他職種や他事業所の連携ができず、サービス担当者会議で顔の見える関係がとりづらい状況であった。 <u>文書照会や電話では行っているが</u> 。
	コロナ禍で、集合してのカンファレンスや話し合いの場がなく、 <u>電話などでの情報交換</u> 。
	カンファレンスや担当者会議を頻繁に持ちたかつたが、コロナ禍の影響でできず、あきらめたことが多くあつた。そのため、密に電話や連絡や、各サービスの橋渡し、 <u>情報提供はできるだけ行えるように努めました</u> 。
課題への具体的な相談支援。	訪問日数や時間が限られる中で、 <u>課題とその対処方法について具体的な相談を行うことが多かつた</u> 。実際に解決に向かうかどうか、そのタイミングや期間は違いがあり、ケースの状況に応じて対応していた。
別居親族をキーパーソンとして設定。	要介護者本人は夫が介護しているが、同じくらいの年齢。(中略) 一生懸命尽くしておられる一方、受け入れられず、何度も失敗をするのでかえって本人がインプットしてしまい、泣いたり、サービス利用を嫌がったりする。 <u>別居親族の理解が深く、陰のキーパーソンとして時々、お話しさせていただいています</u> 。
	<u>別居している家族にも協力を依頼</u> する。
テキスト通りの支援は行えない。	介護者の方は、私たちの人生の先輩であり、テキスト通りのことはできません。アドバイス・支援を行う際の声かけ方法やタイミングは慎重に行っており、 <u>テキストの言葉を考えてばかりもいられません</u> 。

IV. 総合的考察および結論

介護支援専門員のソーシャルワーク実践スキル 16 項目のうち、平均値が高かった項目は、①「介護者と信頼関係を築くことができるように、話を何度も聴いた」②「これまで介護者がとってきたコミュニケーション方法や行動を否定せず、介護者に溶け込むように努力した」③「介護者と信頼関係を築くことができるように、介護者宅を訪問した」④「介護者のイライラが発生するのは、どのような場面であるのか、どのような理由が背景にあるのか」という点について介護者の認識度合いを確かめた⑤「他職種とカンファレンスの機会を持った」⑥「他職種と連携をして、訪問や面接を行った」⑦「介護者がこれまで送ってきた生活史について、称賛した」であった。福島〔2005〕による因子分析の結果と照らし合わせると、＜信頼関係を築くスキル群＞に属するソーシャルワーク実践スキルの活用頻度をもっとも高いことが分かる。

介護支援専門員の性別・年齢・実務経験年数とソーシャルワーク実践スキルとの関連を分析したところ、性別および実務経験年数とソーシャルワーク実践スキルとは関連がなく、年齢が高くなるほど、「自分が問題行動を処理したりコントロールする方法を介護者に伝えた（行動変容の促進）」「介護者が育った家族における人間関係や価値観が今抱えている価値観や行動に影響を及ぼしていることを理解してもらうようにした（ポーエンの家族療法）」「介護者それぞれにとって問題が解決した状態とはいかなる状況を示すのかを確かめた（ミラクルクエスト）」という3項目について、活用頻度が高まることが分かった。

福島〔2005〕の研究の因子分析の結果と照らし合わせると、ミラクルクエストとポーエンの家族療法というソーシャルワーク実践スキルは＜対人関係技能や自己評価を高めるスキル群＞、行動変容の促進は＜問題予防や課題解決のスキル群＞に属するものであり、介護支援専門員は年齢を重ねると、介護者自身に変化を求めるソーシャルワーク実践スキルを活用する頻度が高くなるといえる。これら3つの項目は、ある程度教育や経験を積まなければ習得することが難しいソーシャルワーク実践スキルであるといえるのではないかと。

ソーシャルワーク実践スキルの自由記述に関する分析より特記すべき事項としては、夫介護者は、プライドや確固たる人生観を抱えていることを理解することが必要であるという意見や、医療職による意見・介入を試みる

ことも効果的な部分があるという意見があったことや、各事業所による意見照会という支援も行われていることが明らかとなった。夫介護者と信頼関係を構築するスキル群とは、夫介護者が抱えているプライドや「人に迷惑をかけないで介護する」といった独特の価値観を抱えていることを否定しないことを指し、夫介護者の価値観や人生観を理解したうえで支援をしていくことが重要であることが改めて強調されたといえる。

今回の研究の限界は、R2乗が0.02～0.03という非常に低い値を示したため、今回作成したモデルを一般化するには限界がある。また、今後の研究課題は、なぜ、介護支援専門員の年齢が、実務経験年数とは関係なく、直接、ソーシャルワーク実践スキルの活用頻度に影響しているのかを考察することである。年齢の高い人が独立して持っているものとは何か、それを追求することは本研究ではできなかったが、今後、インタビュー調査を行う必要があると考える。

＜謝辞＞

この場をお借りしまして、本調査にご協力いただきました皆様に、心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

＜引用文献＞

- ・福島喜代子, 2005, 『ソーシャルワーク実践スキルの実証的研究～精神障害者の生活支援に焦点をあてて～』, 筒井書房.
- ・『厚生労働省, 家族介護者マニュアル～介護者本人の人生の支援～』, 2018.
- ・『高齢社会白書(令和5年度版)』, 2023.
- ・西尾美登里・坂梨左織・木村裕美・古賀佳代子, 2019, 「在宅で認知症者を介護する男性の情緒的疲弊」『日本認知症ケア学会誌』18(2), 524-533.
- ・太田貞司, 2019, 「男性介護者支援の課題—「介護殺人」検証の必要性—」『高齢者虐待防止研究』第15巻第1号, 23-28.
- ・宇多みどり・都筑千景・金川克子, 2017, 「訪問看護を利用している男性介護者の実態と支援ニーズ—夫介護者と息子介護者の比較による検討—」『神戸市看護大学紀要』Vol.21, 49-59.